背景化する隠喩と隠喩使用の背景

――ブルーメンベルクをめぐるひとつの哲学的問題系――

下田和宣

はじめに　遺稿研究・伝記研究の進展とこれからの課題

本研究は二〇世紀ドイツの思想家ハンス・ブルーメンベルク（Hans Blumenberg, 1920-1996）の諸著作を分析し、「背景」という観点からそれらに通底する思想を明らかにする。ブルーメンベルクの思想がはたして伝統的な「哲学」の名に値するものであるか、彼自身がそもそも「哲学者」として分類されることを望んでいたのかという問題はどこまでも残るが、本研究の作業は「背景」に関連する問題系の筋道をひとつ明確にすることで、その思想に取り組む哲学的意義を積極的に提示しようとする試みである。(1)

ブルーメンベルクの思想的核心がどこにあるか、という問いは最近の研究状況を概観するかぎりもはや放棄されてしまったかのようである。たしかにブルーメンベルク自身、「隠喩学」、「非概念性の理論」あるいは「歴史の現象学」などといった枠組みによって自身の研究プロジェクトをラベリングして提示してこなかったわけではない。しかしながらそれでも、それらのどれも彼の仕事全体をカバーする適切な概観を与えるものではないのではないか。この疑いはとりわけ最近の遺稿研究の充実と、それに根ざしたいくつかの伝記研究の刊行によって広く確信へと変わりつつある。(2)

かつては例えばシュテルガー[3]のように、初期の隠喩学から後期の生活世界論へという大きな発展史の見取り図を描くこともできた。また、二〇〇〇年代以降はブルーメンベルクの「人間学」が彼の多彩なテーマを持つ著作を統一的に読み解く鍵として期待されてきた。遺稿『人間の記述』(*Beschreibung des Menschen*, 2006) およびオリバー・ミュラー[4]に代表される研究の公刊によって、二〇世紀ドイツにおける「哲学的人間学」の議論を照らし合わせることで「ブルーメンベルク哲学」を確認することが流行となっている。しかし初期論集 (SL) の出版やフラッシュの初期研究[5]によって若きブルーメンベルクが「人間学」に回収されない多様な問題系を相手取るように思考していたこと、むしろそれらの初期における取り組みが後年の著述に反映していることが改めて提示された。そこから果たしてブルーメンベルクの思考を「人間学」として一元的に理解すべきかどうかが問われることになる。

二〇二〇年に出版されたふたつの伝記研究は、読み方によっては対極的である。ゴルトシュタイン[6]はその生涯に沿い、そのつどの問題を哲学的に掘り下げることで、ブルーメンベルクの「哲学的ポートレート」を描き出そうとする。それによって明らかになるのはブルーメンベルク的思考の基軸としての「離散的人間学」(die diskrete Anthropologie)[7]である。人間とは何かという問いに収斂する古典的人間学とは異なり、ブルーメンベルクは直接自己を表すことのない「隠喩的」ないし「迂回的」存在者としての人間理解のもとで、思考を拡散させつつ人間存在を浮上させようとしているのだ、とゴルトシュタインは見る。

独自の鋳直しを含みつつもいまだ「人間学」という枠組みを手放すことのないゴルトシュタインに対して、ツィルはそうした既存の枠組みにあてはめることを積極的に断念する。「絶対的読者」というその伝記研究のタイトル[8]が示唆しているように、ブルーメンベルクの本領はそのときどきのさまざまな哲学的問題を彼が引き受け、読み込むという一見して受動的な作業に見出されるべきであるという。独自の積極的な「ブルーメンベルク哲学」を探し、安易なパッケージ化を求めているあいだは、ブルーメンベルクを真の意味で読むことはできないのではない

か。このように、非常に広範かつ多量な資料を引き合いに出すことで、ツィルはブルーメンベルクの読者に対して根本的な問いを投げかけている。

マールバッハのアルヒーフに自ら潜り遺稿の山と格闘しつつ、これまで知られていなかった多くの資料源泉を引用することで提示されたツィルの議論には相当な説得力があり、ブルーメンベルク研究のひとつの重要な到達点であることに疑いはない。だからこそなおさら、ここには新しい問題が生まれてこざるをえない。私たちは「ブルーメンベルク哲学」を求めずに、あるいは何らかの期待を持たずに、それでもなおブルーメンベルクを読むことはできるのだろうか。伝記研究という性格からして、ツィルはその問いに対して積極的な解答を試みているわけではない。彼の研究の大きな意義はむしろ、ブルーメンベルクをありていのレッテルから解放し、新たな読解の可能性をオープンにしたところに認められるだろう。だとすればなおさら、そこから先が問題となる。

本研究は、ブルーメンベルクへの新たな研究アプローチとして、「隠喩学」や「人間学」といったブルーメンベルクがそのつど提示する主題にこだわるのではなく、むしろそれらのさまざまな主題的考察を根底で支えており、かつその考察のもとで同時に練り上げられていく問題群の存在について明らかにすることにしたい。それらの諸問題はけっして目立つものではない。それでも、表向きのプレゼンテーションにとらわれることがなければ、叙述を貫く考察の底流を掘り当てることはできるのである。(9)

ブルーメンベルクの思考を哲学的な観点から性格づけている問題群は、けっしてひとつではない。とはいえここではひとまず、「背景」およびそれに類する事柄の考察に的を絞り、検討を行うことにしたい。まず、五〇年代後半で立ち上げられた「隠喩学」プロジェクトにおける「背景」問題の所在を見る。とくに注目すべきなのは、モデル化を行う隠喩使用が思考の背景となるという「背景隠喩法」と呼ばれる現象に関する議論である。確認するように、初期隠喩学では「背景隠喩法」の問題は際立った位置を与えられていない。それがとくに（皮肉な言い方であ

るが）前面化するのは、隠喩学の議論が後に人間学や生活世界論と合流するかたちで拡大し、ブルーメンベルク自身によって「非概念性の理論」という枠組みが提示される頃である。

本研究では、ブルーメンベルクのこれらの形成史的発展を、「背景」問題の深化として捉えてみたい。そうすることで、晩年に特有の議論展開も、その流れから切り離さずに読み通すことが可能となるだろう。そこから改めてブルーメンベルク特有の思考が向かう先について考えてみたい。すくなくとも本論文はそのための準備作業を提供するはずである。

思考や情念の「背景」にあってそれらを駆り立てているもの。あらかじめ言えばそれこそ、ブルーメンベルクのひとつの根本テーマだと考えられる。とはいえ彼が試みるのはいかなる意味での形而上学でも超越論でもない。だとすればそもそも「背景」へとアプローチするとはどのようなことだろうか。「背景」を前景化することはその背景性を剥奪することでしかないのではないか。ブルーメンベルクはこの問題に対して別の方法を要求し、それを錬成させていくのであるが、その先にどのような思考が結実するのかを明らかにするためにも、まずは「背景」が彼にとっていかなる問題であったのかが理解されなければならない。

第一章　概念形成の現場へ――概念史研究の「補助手段」としての隠喩学

第一節　隠喩学の形成

この章では、一九五〇年代後半に「隠喩学」(Metaphorologie) として立ち上げられるブルーメンベルクのプロジェクトを概観し、そこで「背景」という問題がどのように扱われているかを確認する。隠喩に対するブルーメンベルクの着目が、その思想形成のどの時点まで遡れるかははっきりと確定できない。それでもたとえば、彼が博士論文（一九四七年）と教授資格申請論文（一九五〇年）を仕上げた後で発表した、「絶対的な父」（一九五二年）と

いうタイトルの新聞記事には後につながるような着想がすでに見られる。カフカが父親に宛てた書簡を頼りに、ブルーメンベルクはそこで「父」という言葉が「現実の父より以上のことを「意味」しうる」(SL 107)こと、すなわち「父なる神」を含意しうることを述べている。[10]

以下では初期の隠喩学の展開として、論文「真理の隠喩としての光」(一九五七年)、講演「隠喩学のためのテーゼ」(一九五八年)、そしてプログラム的な著作として発表された『隠喩学のためのパラダイム』(一九六〇年)を扱う。これらの資料を読解するにあたりまず注意しておかなければならないのは、ブルーメンベルクの「隠喩学」に対して、スタンダードな言語学的隠喩論や、斬新で深い哲学的隠喩解釈を期待してはならない、ということである。「真理の隠喩としての光」というタイトルを持つからと言って、真理の隠喩は光であると彼が主張しているわけではない。ブルーメンベルクは隠喩現象そのものに対する直接的な理論的考察を行う代わりに、哲学や科学の分野に見られる隠喩使用を歴史的に記述していくのである。だとしても着眼点の独自性ゆえに、そこから即座にブルーメンベルクを文献学に忠実な歴史家として読むことにも躊躇いが生じる。そもそも隠喩史を再構築することで彼は何をなそうとしているのだろうか。この点はブルーメンベルクの基本的な思考スタイルを理解するポイントのひとつなので、詳細に検討していくことにしたい。

論文「真理の隠喩としての光」(Licht als Metapher der Wahrheit)はその副題として「哲学的概念形成の前領域における」(Im Vorfeld der philosophischen Begriffsbildung)と付けられている。そこからすでに、あるいはまた論文の冒頭で開陳されている問題意識からも窺い知ることができるように、ブルーメンベルクはさしあたりここで隠喩の場所を「概念」ないし「概念論」(術語論、Terminologie)との関係へと位置づけている。その問題設定によれば、昨今ではさまざまな哲学的概念が濫立しており、混乱が見られる。そこでまず哲学的概念とは何かを吟味しその境界画定がなされなければならない。ただその際に、内在的な概念分析だけではなく、非概念的・前概念的領域をも

含み込んだ概念の形成が問題にされなければならない。その形成には「神話的諸変容の広大な領域、多様な形態を持つ隠喩使用に沈み込んでいる形而上学的推測の領野」(LM 139) が関わっている。概念的思考の形成に関わるこの「前領域」(Vorfeld) を対象とするという意味で、ブルーメンベルクがここで構想する隠喩論は、「哲学的「隠喩学」」(LM 139f.) と呼ばれる。

ブルーメンベルクの仕事は、ここでは真理の概念的把握を可能にしているものとして、真理に関して使用された隠喩を主題化し、真理がとりわけ「光」表象といかにして結びつくのか、あるいはどのような条件のもとで後者が前者を転義的に指示しうるのかを探るものである。(ブルーメンベルク的)隠喩学者にとって、真理と光が結びつくという事態、およびそこで起こっているはずの出来事はまったく自明なことではない。真理が光と結びつかないこともありうるし、後で改めて言及するが『隠喩学のためのパラダイム』で詳述されているように、真理はそのほかにもさまざまな隠喩をそのつど別様な仕方で引き寄せるからであり、真理が光ではないことすら積極的な可能性としてありうるからである。

隠喩の使用者は自身の使用する隠喩に対して明確な概念的自覚を持っているとは限らない。「真理は光である」という隠喩使用に対して違和感を覚えることがなくても、真理がなぜ光であるのかを語ることは反省的であり、事後的である。それゆえ自身に馴染みのある隠喩を観察するだけでは、隠喩使用が概念形成に対して持つ潜勢力は明らかにならないのである。それゆえ隠喩使用の機能を考察する方法は規範的ではなく記述的であらざるをえない。つまり歴史的に出現した諸言説をひとつひとつたどりながら、そのつどの隠喩使用が概念把握の可能性と不可能性の条件として機能するさまを取り出して考察するほかないのである。ブルーメンベルクによる隠喩学的思考のスタイルはひとまずこのように整理できよう。

第二節　概念史と隠喩学――五〇年代後半の布置状況

概念形成の現場における隠喩使用の機能という主題設定は、ひとつの時代的なコンテクストを持つ。論文「真理の隠喩としての光」公刊の翌年、すなわち一九五八年に、ブルーメンベルクはドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft, DFG）[11]による研究助成のもとで設立された概念史部会（Senatskommission für Begriffsgeschichte）において講演を行うことになる。概念史研究に関するこの制度的組織についてはクランツによる報告[12]があるので、それを頼りにブルーメンベルク隠喩学の出発に関わる当時の学問的布置状況を整理してみよう。

一九五〇年代当時の「概念史」（Begriffsgeschichte、概念史研究）という研究分野は、エーリヒ・ロータッカー、ハンス＝ゲオルク・ガダマー、そしてヨハヒム・リッターの名前ととりわけ結びついているものである。もっとも熱心にドイツ研究振興協会へと支援要請を働きかけたのが、このなかでは最年長であるロータッカー（Erich Rothacker, 1888-1965）であった。彼の主導のもと、自然科学との競合の中で、歴史学分野・文献学分野と哲学分野との共同研究が模索されていった。国家から研究助成を得るにはそのようなかたちで実証性を担保することが不可欠であるという考えもロッターカーによる組織化の動機的背景としてあったようである。部会が組織した研究大会は一九五八年から一九六六年まで計七回催されるに留まったが、概念史研究の成果は後にリッター（Joachim Ritter, 1903-1974）によって主導的に編集された『哲学の歴史的辞典』[13]や、コゼレク（Reinhart Koselleck, 1923-2006）らの『歴史的根本概念』[14]といった一大事業として結実し、雑誌『概念史アーカイブ』（*Archiv für Begriffsgeschichte*）上に今日に至るまで発表され続けている。また部会の後継として共同研究グループ「詩学と解釈学」（Poetik und Hermeneutik）がブルーメンベルク、ヤウス、イーザーらを中心に立ち上げられ、関連する諸問題が引き続き討論されていった。[15]

概念史部会にとって、理論的には「哲学としての概念史」（一九七〇年）や「概念史と哲学の言語」（一九七一年）

を書くことになるガダマー（Hans-Georg Gadamer, 1900–2002）の影響が著しく、研究会はさながら「ガダマー祭り」（Kranz, a.a.O., 163ff.）の様相を呈していたという。彼から第一回の研究会での講演を頼まれたブルーメンベルクは、当初あまり乗り気ではなかったとのことである。[16] ブルーメンベルクによる講演は彼自身の隠喩学に関連するものであった。論文「真理の隠喩としての光」の問題を引き継いでそれをよりプログラム的に整理し直すものであり、「概念史」を直接的に論じるものではなかったのである。

にもかかわらず、クランツが言うように、ブルーメンベルクの隠喩学講演は「概念史研究という仕事のプログラムのための基本となる水準を提示」（Kranz, a.a.O., S.166）するものであった。先に示したように、隠喩学は純粋な修辞理論ではなく、まずもって概念形成の「前領域」として隠喩を扱うものであった。すなわち哲学の実証学としての概念史という研究プロジェクトの境界あるいはその成立可能性を隠喩使用の問題として主題化することによって、概念史研究の根底にある問題性を可視化するものだったのである。

第三節　概念論ないし概念史研究の基礎としての隠喩学

「隠喩学のためのテーゼ」（Thesen zu einer Metaphorologie）と題されたブルーメンベルクの講演は、一九五八年五月の概念史部会第一回研究会で行われた。[17] クランツの報告には七つの観点から簡潔にまとめられたテーゼが掲載されている（Kranz, a.a. O., S. 186–189, TM）。それから二年後に公刊される著書『隠喩学のためのパラダイム』と同じ性格を持つため、重なる議論は多いが、この講演にはブルーメンベルク隠喩学の全体像が明瞭かつ簡潔に提示されているため、ここでとくに取り上げることにしたい。

講演のテーゼは隠喩学構想に関わる次の七つの要点からなる。

Ⅰ．すべての事象が明晰判明に定義されているということが、哲学の求める理想的状態であろう。そのように仮

定するなら、概念の歴史的展開はあくまでそれに至るまでの中間段階として把握されるに留まる。その場合、歴史研究は哲学に対して本質的な意味を持ちえない。ちなみにこのような歴史の意義を弱める立場について言及する場合、ブルーメンベルクの念頭にあるのはつねにデカルトである。

中途段階としていわば道半ばにあるものとして規定されるものは、哲学的な観点から二次化させられてしまう。このような問題意識は主題的に見れば歴史をどのように理解するかということに関わるものでありながら、概念的明証性には至らない転義的な語りとしての隠喩の問題を示唆するものでもある。

Ⅱ．明証性を持たない転義的な語りが哲学的言語として積極的に認められるためにはどのような場合が想定されうるか。例えば隠喩を概念の「残余」として捉えるなら、隠喩を使用することは結局「ミュートスからロゴスへ」の途上に位置づけられる非本来的な語りでしかなくなる。たしかに、概念的思考の反省的な自己確定の一助となりうるという点で、そのようなものを研究することにも一定の役割を認めることはできるかもしれない。それはしかしどこまでも哲学的に二次的なものに留まらざるをえない。

ブルーメンベルクの主張はむしろ、隠喩を「哲学的言語の克服されざる根本要素」として見ることの可能性にかけられている。彼の観察によれば、ある種の隠喩使用は概念的明証へと還元することのできない頑なさを持つ。「転義の領域から〈連れ戻すことのでき〉ないもの」として現れ、「概念へと解消されえない言明機能を持つ」いくつかの隠喩を、ブルーメンベルクはここで「絶対的隠喩」(*absolute* Metaphern) と呼んでいる（TM 187）[18]。概念の明晰判明へと還元されることなく「隔絶（ab-solut）」されたあり方を持つ隠喩の存在は、デカルト的理想に対して根本的な疑念を突きつけるものである。それゆえそのような意味での絶対的な隠喩があるのであれば、それを発見・確定し分析することは「概念史の本質的な部門」となりうるのである。

ブルーメンベルクは絶対的隠喩が可能化する言説領域をまず画定する作業を「隠喩学的パラダイム論」(die met-

aphorologische *Paradigmatik*）と呼んでいる。そこからさらに「隠喩史の課題」と「隠喩学的体系論」（die metaphorologische *Systematik*）の可能性についての問いが現れるだろうとされる。ここで言及されている「隠喩学的パラダイム論」は後の著作である『隠喩学のためのパラダイム』を予告するものであるが、いずれにしても、ブルーメンベルク隠喩学が「パラダイム論」と「体系論」の二段構えでまずは構想されていたということをさしあたり確認しておきたい。

第四節　概念の基底層としての絶対的隠喩

Ⅲ．「絶対的隠喩」について説明がさらに続けられる。「あますところなく論理化することができない、あるいはまったくできない」「絶対的隠喩」は、ただ概念的言明との関係においてのみ絶対的」なのであり、それは他の隠喩によって置き換えられることがない、ということを意味しない。むしろ隠喩が概念に還元されることなく別の隠喩へと置き換えられ修正される特定の「遊動空間」（Spielraum、余地）が問題なのである。その歴史的なダイナミズムを追跡することが「隠喩学的体系論」の課題だとここではされている。

では、隠喩学に取り組むことは哲学にとって、あるいは概念史研究にとってどのような寄与となるのだろうか。それについてブルーメンベルクは次のように示唆している。

> 隠喩は歴史を持つ、しかも概念よりもラディカルな意味で。隠喩の歴史的変容は、歴史的な視覚方式、究極的な根拠づけ、意味地平そのもののメタ的な推移系列の層（Metakinetik geschichtlicher Sichtweisen, Letztbegründungen, Sinnhorizonte selbst）を前景へともたらす。そのラディカルさを踏まえればそれはもはや比較の図式に――ここでは概念論的な明晰判明の進歩という図式に――還元されえない。つまり歴史的隠喩学における

本来的なテーマとは歴史そのものの歴史性（die Geschichtlichkeit der Geschichte selbst）なのである。方法的に見れば、隠喩学は狭義の「概念論」（Terminologie、術語論）としての概念史に寄与しうるだろう。（TM ebenda.）[19]

ブルーメンベルク隠喩学の核心に関わるいくつかのアイデアが端的にまとめられている箇所である。まず、隠喩には概念よりも根底的・根元的な（radikal）意味で歴史がある、とされている。この確信は「真理の隠喩としての光」においても表明されていたように、概念の「前領域」としての隠喩使用が持つ概念形成の機能を踏まえることで主張されている。絶対的隠喩は概念化されざる次元において歴史的展開を持つのであり、その展開が歴史の各局面に属する概念的思考の可能性を用意するのであって、逆ではない。隠喩史固有の力学に注意を払うのであれば、概念の変化変容はもはやそれ自体の自己発展過程として見なしえないのである。こうした基本的理解から、「隠喩の歴史的変容」を追跡することではじめて、「歴史的な視覚方式、究極的な根拠づけ、意味地平そのもののメタ的な推移系列の層」が明らかになるとされる。この基層に注意を払わず思考や概念の歴史を記述することは、結局のところ表面的な作業に留まる。それに対して、隠喩使用の歴史的現象を主題化することは、むしろ概念史のメタ運動を開示する。[20] ブルーメンベルクによれば、それこそ「歴史の歴史性」をなすものにほかならない。

このように、絶対的隠喩に対して歴史哲学的考察を絡ませることで、ブルーメンベルクは自身の隠喩学を概念史あるいは概念論と関係づけている。隠喩学と概念論の関係についてここでは遠慮して「寄与」と言っているが、ブルーメンベルクの野心はより大胆であり、かつ実証的な概念史研究に対する根本的な不信感を含むものである。すなわち、ブルーメンベルクはここで、明晰判明に定義された概念、あるいは概念論を基礎とする伝統的な哲学的立場から離れ、隠喩の問題を逆に基盤とすることで哲学研究に関わる位階構造そのものを逆転させようとしているのである。いまや歴史の歴史性を明らかにしうる隠喩学が、概念論ないし概念史研究を基礎づけるべきなのである。

第五節　答えることのできない問いに対する答えとしての隠喩

Ⅳ．続く第四テーゼは隠喩学的分析のあり方に関わっている。絶対的隠喩の絶対性は明晰判明な概念性に還元できないという点に求められることが先に述べられた。したがって隠喩学の課題は絶対的隠喩の「意味」を概念把握することではありえない。概念化の作業によって歴史の歴史性が明らかになるのではなく、むしろ概念化されざる隠喩特有の歴史的変遷のうえに、概念的思考の推移が事柄として位置づけられるのであった。

ブルーメンベルクは隠喩が特定の「問い」に対する「答え」として機能している点に着目する。哲学的言説においてある隠喩が使用される。例えば真理とは光である、あるいは真理には抗いがたい力強さがある、真理は衣服を剥ぎ取られた裸の状態である。このように語られるのは、そもそもなぜであろうか。ブルーメンベルクは隠喩が否応なく呼び込まれざるをえない状況に、真理への問いを概念による定式化によって終了することに対する拒否を見て取る。[21] 真理とは何かというような「その志向充足が体系的にはそのつどにはほとんど明示化されえないような前体系的性格の問い」(TM 188) への答えは、概念よりもはるかに意味に富んだ隠喩の形式においてかつてより与えられてきたのである。

Ⅴ．第五テーゼにおいても、原理的に解答不可能な哲学的問いへの「答え」としての絶対的隠喩の形式性格がさらに言及されている。隠喩は「原理的に答えることはできないが、それゆえに消去することもできないような問い」(TM ebenda.) への答えである。問いへの答えとしての絶対的隠喩は、その絶対性からすれば概念化作業を拒むものなので、そこで表明されている理解が正しいか正しくないかという真偽の秤にかけられうるものではない。言い換えれば絶対的隠喩の真理はそのつどの文脈に依存する「プラグマティック」(TM ebenda.) な真理である。「真理が光である」という主張に正当性を与えるのは命題それ自身ではなく、それが発せられる状況なのである。

先にも触れたが、それゆえ隠喩学は絶対的隠喩を本質的に歴史的対象として扱うほかなく、ブルーメンベルクを

はじめ隠喩学者自身が、何らかの適切な隠喩を駆使して哲学的問題に答えを与えようとするわけではない。隠喩学はむしろそのような試みに対する断念を表明することで、新しい学問的地平へと思考を転ずるのである。

第六節　隠喩のモデル機能

では、そうした諦めのもとで開けてくる隠喩学特有の地平とはどのようなものであろうか。絶対的隠喩は言説の内在的な真理に関わるのではなく、むしろプラグマティックな振舞いの中で機能するものである。「それは私たちに基礎的な確信、憶測、価値づけを指し示す。そこから態度、期待、活動と無為ないしエポケーが調整される」(TM ebenda.)。

例えば「世界とは何か」という問いに対して、それは生き物である、洞窟である、鏡である、書物である、橋である、劇場である、時計であるなどと語られる。それらは純粋な理論的表明ではなく、何らかの実践的なオリエンテーションを果たすものである。例えば「世界は時計である」という機械論的な隠喩は、世界に対して私たちの考え方や決断を規定して導き、「修理」や「調整」という時計モデルにその可能性を担保された態度を背景的に基礎づける。ブルーメンベルクは絶対的隠喩が備えているこうした性格を隠喩的モデルの「方向設定の機能」(TM ebenda.) と呼んでいる。隠喩は語りえない問いに対する答えとなるばかりではなく、そこからさらに、私たちが対象に関わる際の思考と実践の舞台設定を行うのである。

Ⅵ．第六テーゼは絶対的隠喩のこの「モデル機能」(TM 189) について手短にまとめている。隠喩を概念的思考との関連において主題化する隠喩学にとって、中心的な分析対象になるのは、明晰判明が目指されるはずの哲学的言説に不意に出現するような隠喩の機能である。第五テーゼで見たモデル化された隠喩は、ブルーメンベルクによればそのような哲学的思考の「背景」ともなる。それについては次のように言われている。

とりわけここで対立する隠喩タイプの間での先行的な決断が役割を果たしている。例えば有機体か機械かという基本的な表象の間での選択などである。私たちに先立って思考しており、私たちの世界観のいわば「背後に」(im Rücken) 立っているのは言語だけではない。より強制的に、私たちはイメージの選択と蓄積によって (durch Bilderwahl und Bildervorrat) 決定されており、私たちがそもそも「経験にもたらす」ことができるものの中で「誘導されて」(kanalisiert) いる。(TM ebenda.)

絶対的隠喩は明晰判明に答えられない問いへの答えであるだけではない。隠喩を使用することは、それまで伝統的・文化的に蓄積されたイメージ (例えば光や時計など) を選択しそのつどの状況に適用することである。ブルーメンベルクはここで、それが概念的思考や決断に対する背景として機能することを指摘しているのである。あたかも水路や導管 (Kanal) のように、選択された隠喩はモデルとして思考を密かにどこかへと誘い込む背景となる。

ここでまさに、本論文のテーマとしての「背景」の問題系が登場することに注意したい。モデル化された隠喩が背景として機能するという観点は、論文「真理の隠喩としての光」ではいまだ表立つことのない側面であった。そこではもっぱら、「哲学的概念形成の前領域」としての隠喩のあり方に視点が絞り込まれていた。いまや隠喩学はそれとともに、概念そのものの領域における隠喩の機能を明示的に自らの対象として理解するのである。

一九五七年の論文から一九五八年の講演への間で決定的な転換があったとまでは言えないが、概念論および概念史の問題を積極的に隠喩学へと組み込み整理し直す作業の中で、隠喩の背景的機能の問題は主題的に浮上してきたものであることが少なくとも考えられるだろう。とはいえここではまだいくつかの問題系が並存していると見るべきである。それに加え、やはりこの時期のブルーメンベルク自身による「概念形成の前領域」という言葉の選択には、背景という主題を副次化させてしまうものがある。先取りになるが「前領域」という表現は、一九六〇年代以

降は主張として事実後退していくことになる。その代わりに浮上してくるのが「背景」の問題系なのである。

第七節　隠喩史の類型論としてのパラダイム論（第七テーゼ）

以上のテーゼによってブルーメンベルクは隠喩学の問題設定と独自の視点を簡潔に整理する。それを受けて最後に、彼は隠喩学の具体的な作業のひとつとなる「隠喩史の類型論」（Typologien von Metaphernngeschichten）を次の七つに整理して提示している。

1. 神話から隠喩への移行（プラトンの例）[22]
2. 翻訳可能な隠喩の絶対化（プラトンの洞窟と新プラトン主義のコスモス-洞窟）[23]
3. 隠喩から概念への移行（»Wahrscheinlichkeit«）
4. 隠喩の利用（数学上の隠喩使用、人間中心主義的隠喩としての天動説）[24]
5. 破砕のための隠喩使用（Sprengmetaphorik）。表象を惹起しつつ破壊する。それにより超越を「体験可能」なものとする（思弁的神秘主義の隠喩タイプ）[25]
6. しばしばアレゴリーへと境界を越えていくような、隠喩の内在的な紡ぎ出し（光が燃える）[26]
7. モデルとして受け取られた隠喩をその出どころとなる基体の批判へと折り返す（啓蒙主義の啓示批判的原理としての「神は光である」）[27]

(TM ebenda.)

ここで予告された一覧の順序と内容に忠実であるわけではないが、隠喩の使用法に関わるこの分類を思想史的に

検討吟味するのが、一九六〇年に公刊される『隠喩学のためのパラダイム』、とりわけその後半部となる。とはいえブルーメンベルク自身も注意しているように、哲学的な隠喩使用に関わるこれらの基礎的な枠組みを歴史的に見出して分類整理するという仕事そのものが、隠喩学の本題であるわけではない。つまり「パラダイム論」はさしあたりただ「その分析的遂行能力の直観化のための補助手段（Hilfsmittel）」（TM ebenda.）であり、いわば隠喩学の固有領域を画定するための発見法的なプロレゴメナでしかない。

いずれにしても以上が一九五八年「隠喩学のためのテーゼ」講演の内容である。まとめれば、概念史を扱うにはデカルト的な明証の理想を断念しなければならないこと、特定の隠喩使用の内容は明晰判明な概念によって取り出すことができないということ（絶対的隠喩）、ある種の隠喩使用は原理的に答えが得られない問いへの応答であるということ、その応答が概念的思考や決断の背景として機能すること、これらがここで明確に提示された。概念史研究という趣旨から考えると、ブルーメンベルクの隠喩学はそれに対して補完的であるよりも、対立的であり、それがはらむ問題を浮き彫りにするものであったと言えよう。[28]

第二章　『隠喩学のためのパラダイム』における絶対的隠喩と背景隠喩法

第一節　触媒的領域、下部構造

「隠喩史の類型論」としての「パラダイム論」から「体系論」へという隠喩学というプロジェクトの二段構えは、講演の二年後に『概念史アーカイブ』上で発表され、後に書籍化された『隠喩学のためのパラダイム』（*Paradigmen zu einer Metaphorologie*, 1960）でもはっきりと踏襲されている。「隠喩学的パラダイム論」というものは、もっともただ、かのなお高次の「より深い探求」に向けた予備仕事を課題とするにすぎない。それが求めるのは、その内部で絶対的隠喩を推測しうる諸領野を境界づけ、その画定のための基準を審査することである」（PM 16）。隠喩

使用の類型を発見し、その妥当領域を画定することがここでまず行われるべき作業なのだ、というのである。

『隠喩学のためのパラダイム』は基本的に「隠喩学のためのテーゼ」を踏襲する構成になっている。その「序論」(Einleitung)では先の第一テーゼ(デカルト批判)[29]、第二テーゼ(哲学言語の根本要素としての絶対的隠喩)、第三テーゼ(メタキネーティク)に基づいてプログラム的に説明がなされている。ここではそれらに加えて、「真理の隠喩としての光」以来の概念形成論の観点が再び盛り込まれているのが特徴的である。次の箇所は、それ自体は変化せずに他の物質の変化を促進する「触媒」という言葉によって隠喩と概念の関係性について表現したものである。

> 絶対的隠喩を示すことで、私たちは想像力とロゴスの関係を新たに検討するきっかけを得るに違いないだろう。しかもそれは、想像力の領域を単に概念的なものへの諸変容のための基体として受け取るというだけを意味しない(その場合には、いわば要素はひとつひとつ加工・変形され、イメージのストックは使い尽くされてしまうだろう)。のみならず、自立的に概念世界を豊かにはするが、この基礎的な存立をその際に変形し消尽することがない、そうした触媒的領域(die katalysatorische Sphäre)としてそれを理解する、ということなのである。(PM 15)

「序論」の後の箇所では再び化学的表現を用いることで隠喩使用と概念的思考の関係性について次のように述べられている。「隠喩学は思考の下部構造(Substruktur des Denkens)、すなわち体系的結晶化の基底と培養(den Untergrund, die Nährlösung der systematischen Kristallisationen)へアプローチしようと試みる…」(PM 16f.)。すなわち体系的思考を促進するという隠喩使用に備わるこの機能を取り出すことが概念史研究への寄与となるとされる。このように、ブルーメンベルクは『隠喩学のためのパラダイム』では、概念史研究との関連性をこれまでより強く

意識しているのである。

とはいえ、ブルーメンベルクはその関係性を表現するためにそれ自体隠喩的なものに頼らざるをえないほどには苦心しているようである。「触媒的領域」や「思考の下部構造」といった領域構造的表現と、カントの「象徴」になぞらえながら「隠喩は、プラグマティックな機能におけるモデル（Modell in pragmatischer Funktion）としてはっきりと特徴づけられている」（PM 15）という（「背景」の問題系に属する）機能的作用的表現とがここでは混在している。このような葛藤もやはり概念史研究への従属という初期隠喩学特有の性格づけに起因しているように思われる。

第二節　隠喩学の体系論と背景隠喩法

先の講演で挙げられたテーゼのうちで、第四テーゼ（答えとしての隠喩）、第五テーゼ（プラグマティックな機能）に関わる観点は、『隠喩学のためのパラダイム』では第一章「「力強い」真理という隠喩使用」、第二章「真理の隠喩使用と認識のプラグマティズム」において、真理をめぐる隠喩使用を例に論じられていく。真理に関わる隠喩というモチーフは論文「真理の隠喩としての光」からの派生として理解できよう。ここではそれが、「隠喩学のためのテーゼ」で示された理論的考察のもとでさらに練り上げられていくのである。

背景の問題系を追跡する本論文の観点からここでとくに注目したいのは、先に見た第六テーゼ（モデル化された隠喩の背景的機能）と関係が深い『隠喩学のためのパラダイム』第六章「有機体と機械の背景隠喩法」（VI. Organische und mechanische Hintergrundmetaphorik, PM 91–109）である。言語表現領域の裏側に潜む「暗示的モデル」と呼ばれる「隠喩的背景」（der metaphorische Hintergrund, PM 24）への言及は、『隠喩学のためのパラダイム』[30]の中ではしばしば散見される。それを改めて絶対的隠喩の「背景隠喩法」（Hintergrundmetaphorik）と術語化し、

その機能に焦点を絞りながら隠喩史を再構築するのが、この第六章の課題となる。その叙述を実際に見てみよう。

隠喩使用は概念論的言説が排他的に登場すべき場所であってもひと役買っていることがある。例えばはじめて月を訪れる人の報告は、馴染みのある地理的表現によってなされざるをえない。この例から、理論的言明においても隠喩的なモデルが背景として機能しうることが理解できる。ある思想家の著作を真に理解するために、そのような背景にまで回り込む必要があるのはそのためである。背景にある隠喩使用こそが、まさに真正の哲学者と追従するだけのエピゴーネンとの差であるとブルーメンベルクは語る。真正の思想家は「自身の「体系」を生き生きしたオリエンテーションにおいてつかんでいる（sein ›System‹ in der lebendigen Orientierung hält）一方で、学派経営は諸概念を自分勝手な原子論へと「根こそぎ」してしまう」（PM 91）。

このモデル化された隠喩の背景機能が「もっとも明らかになるのは、対立するメタファーのタイプの間の先行決断が根底にあるところ、例えば有機的なものと機械的なものという主導表象の二元論の内部における選択において」（ebenda.）である。そこで有機体的隠喩と機械論的隠喩が二者択一的に選択される場面を観察することで、ブルーメンベルクは隠喩使用が備えている背景としての機能を明らかにしようというのである。このような導入の後でかつての第六テーゼがほぼ文字通りに反復される。

「言語は私たちに先立って思考しているだけではなく、私たちの世界観においていわば私たちの「背後に」ある。もっと強制的に私たちはイメージの蓄積と選択によって規定されており、一般に私たちに示されうるものと、私たちが経験においてもたらしうるものにおいて「誘導され」ている。ここにこそ、隠喩学の体系論（*Systematik* der Metaphorologie）の意味がおそらくあるだろう（その可能性についてここで予言するわけにはいかないが）。（PM 91f.）

ここでは示唆されるだけに留まっているが、まさに「背景隠喩法」の問題こそ「隠喩学の体系論」の課題であることが明言されている。しかし「パラダイム論」としての『隠喩学のためのパラダイム』の枠内では、その可能な類型領域を発見することだけが期待される。以下では第六章の記述を頼りに、その発見について見ていくことにしよう。

第三節　思考と決断の背景としてのモデル化された隠喩

ヨーロッパ人の隠喩の使い方は有機的であり、アメリカ人の場合は機械的であると言われるが、そこに関わっているのはたんなる嗜好の問題ばかりではない。それらの選択はむしろ「生き方」の様式的区別に関わる基礎表象の次元でなされている。「機械」という隠喩はそれぞれの時代において異なったイメージを喚起するものである。ラテン語のmachinaが古代的なコンテクストにおいて表現していたものは、近代以降で私たちが「機械」という言葉に読み取るものとは違う直観を与える。それゆえ「世界の機械」(machina mundi) という表現で例えば近代機械の代表格である「時計」をイメージしてはならない。「時計仕掛けの隠喩 (*Uhrwerkmetapher*) がはじめて、色あせて無味乾燥な「世界の機械」という表現に影響力の大きい特異性――信頼できる均等性に仕立て上げられたバネが一度引き上げられて回転する――を付与したのである」(PM 93)。新しい技術の時代である近代において、機械としての世界という隠喩は活性化された。そうした文化的条件が整うことで、「機械」は「世界の意義を示す簡潔なプログラムワード、すなわち有機的なものをその魂に制約された固有の本質性において疑いをかける隠喩となりうる」(PM ebenda.)。

古代ギリシア的な「コスモス」(調和) としての世界は、例えばプラトン『ティマイオス』のデミウルゴス神話によれば、全体としてひとつの有機的な統一である。コスモスとしての世界は「時計」ではない。というのもギリシア的な世界観において「人工的・技術的なものは、世界の内部で生み出されるものとして、全体的なものとしての

世界統治の威厳を持ちうることがない」(PM 94) からである。人工的なものは、自然の事柄の「模倣」として、最初から欠陥のある代用品としてそこでは見られている。

それに対して、キリスト教的・神学的動機のもとでは、機械論的な宇宙観が表立ってくる。例えばラクタンティウスはストア派的な有機体的世界モデルに対抗し、機械的世界モデルを提示している。ブルーメンベルクは『神学教程』における次の節を紹介する。「そして［世界］は、それが創造されたものであるなら、生物ではない。というのも生物は創造されず、生まれるのだからである。そして建てられたというのであれば、それは端的に家や船のようなものである。したがって世界の何らかの創造者というものはある。それは神である。一方に創造された世界はあるだろうし、他方の側にそれを創造したかの者がいる」(II 5, 37)。ブルーメンベルクによれば、ラクタンティウスは機械論的隠喩によって神の明白な超越性を担保している。世界は「生まれたものとしてではなく、生み出されたものとして、それ自体では神的なものではなく、純粋な「消費対象」である」(PM 97)。

さらに時代を下り、例えばクザーヌスにとって、創造者としての神と創造された世界という関係性は、人間精神を理解するためのヒントとなる。すなわち設計能力こそが人間精神の概念にとって模範的となるのである。ブルーメンベルクが着目するのは、まさにこうした隠喩的なものに特有の推移系列である。神によって設計された天文学的運動が、モデルとして、いまや人間精神の場へと置き据えられる。

> モデルは理論的客観化の要求から本質的に遠ざけられているように見えたものの位置に〔代わりに〕投影 (projiziert) される。この経過の構造は私たちにとってすでにまったくなじみ深いものである。つまりそれが「絶対的隠喩」の構造なのである。近代的宇宙論の機械観は、人間精神の働きによる新たな概念形成をその前提とした絶対的隠喩の展開である。(PM 98)

ここから議論はデカルトにおける機械世界、さらに「書物」としての世界の隠喩を検討し、啓蒙主義の時計モデルから、フッサールの隠喩使用にまで至る。デカルト的、あるいはフッサール的な世界理解にとって、モデル化は余計なものに見えるが、隠喩学者はそこに、思考を決定的に方向づけている「背景」を読み取るのである。(31)

第四節　初期隠喩学の残された課題

ここまで「真理の隠喩としての光」から講演「隠喩学のためのテーゼ」の分析を経て、そこから『隠喩学のためのパラダイム』の記述に対する整理を試みた。十九六〇年に立ち上げられた初期隠喩学構想にとって決定的であったのは、概念史研究にどのような寄与を果たすことができるのかという視点である。しかし隠喩学が概念史研究に対して担う役割が肯定的なものであるか、批判的ないし否定的なものであるかは曖昧なままに留まった。その曖昧さは概念ないし概念的思考に対する隠喩の位置が多様な表現によって定められていたこととも連関するように思われる。隠喩は概念形成の「前領域」であるとともに、それを促進する「触媒的領域」でありながら、「思考の下部構造」として体系的思考の結晶化を担いつつ、思考が実際に働く際の「背景」でもある。これらの要素が混然一体として融け合っていたのが初期隠喩学の特徴でもある。

たしかに次のように考えることもできる。これらの曖昧さは「パラダイム論」に固有の制約に由来するのであり、概念的思考に対する隠喩使用の機能については「体系論」において明確に整理され解決されるのだ、と。しかしながら隠喩学の「パラダイム論」と「体系論」という初期隠喩学で明示されたこの区別が何を意味しているのか、ということもまたはっきりしない。「隠喩史の類型論」としての「パラダイム論」を本来的隠喩学への導入として捉えるとしても、類型の先取り的な発見がその後の考察に対してどのような意義を持ちうるのかは示されていない。先に見たように、『隠喩学のためのパラダイム』第六章で、「背景隠喩法」が「隠喩学の体系論」に関わる中

核的課題であることが示唆されていた。しかし類型の発見という作業は、ラディカルな歴史性を示す隠喩史の実際的な検討に先立って行われうるものなのだろうか。また、第六章の歴史記述はすでにして何らかのかたちで「背景隠喩法」の問題に踏み込んでいるか、あるいは前提としているのではないだろうか。

このようないくつかの疑問は、後のブルーメンベルクの思想展開を見るなら、ますます掻き立てられるものでもある。次に見るように、七〇年代のブルーメンベルクは概念史研究を隠喩学に対する「限定」として反省的に把握し、そこから解放されることで隠喩学は真価を獲得すると考えるようになる。そうした反省の理由はどこにあるのか。概念史研究の限定から解放された隠喩学とはどのような思考であるのか。次章で確認することにしたい。

第三章　理論的好奇心を駆り立てるもの——隠喩学から非概念性の理論へ

第一節　視点の方向転換

『隠喩学のためのパラダイム』発表のほぼ二〇年後にあたる一九七九年、ブルーメンベルクは『観望者のいる難破船』(*Schiffbruch mit Zuschauer*, 1979) 最終章「非概念性の理論への展望」(Ausblick auf eine Theorie der Unbegrifflichkeit) で、隠喩学の自己理解に対する「幾ばくかの変化」を次のように述べている。

> エーリヒ・ロータッカーは一九六〇年に〔私の〕『隠喩学のためのパラダイム』をその雑誌『概念史アーカイブ』に収めた。そのとき彼は編集者としてそれを、彼自身がまさに着手しようとしていた「概念史」のための補足的な方法論と見なしていた。それ以来、隠喩学の機能に変わるところは何もなかったが、それが指し示すものについては幾ばくかの変化があった。とりわけいまや隠喩使用は、非概念性 (Unbegrifflichkeit) に関するほんのわずかな特殊ケースにすぎないと見なされるべきなのである。(SZ 87)

ここでブルーメンベルクは「非概念性」という枠組みのもとに隠喩使用の問題を包括しようとしている。それにより概念史研究という当初与えられていた限定が取り払われるのである。初期隠喩学は「概念形成の前領域」を主題化することで概念史研究への寄与を図るものであった。ところがいまや「隠喩使用はもはや、手探りで理論を構想しようとする際の主要な領域として、あるいは概念形成の前領域として、あるいは専門言語がいまだ固められていない状況における間に合わせとして、理解されるだけではない」(SZ ebenda.)。それどころか、概念的思考を可能化する「絶対的隠喩」の機能という隠喩学の中心テーマについてさえ、さらにその基礎が掘り下げられるべきだとされるのである。

いまや視線の方向は逆転した（die Blickrichtung habe sich umgekehrt)、と言えるかもしれない。それはもはや、とりわけ概念性の構築にだけではなく、あらゆる理論に対する動機づけを絶えず後ろ立てているもの――絶えず現前に引き留められうるものではないにしても――としての生活世界への、遡行的な結びつき（die rückwärtigen Verbindungen zur Lebenswelt als dem ständigen… Motivierungsrückhalt aller Theorie）にも関連づけられるのである。(SZ ebenda.)

ブルーメンベルクの問題意識は概念形式の観点にはもはや限定されない。このように、隠喩学はいまや「生活世界」の理論に結びつけられることで「非概念性の理論」へと拡張する。生活世界から誘発されるのは隠喩だけではなく、そこには科学や学問一般の理論定立の動機もまた含まれる。注意するまでもないことだが、このような拡張に基づくことで、隠喩学の試みが全体として撤回されるのでも、隠喩が考察の対象として特権的な地位を剥奪されるわけでもない。問題なのは、はっきりと述べられているように、隠喩に対する着眼点を変えることなのである。

初期隠喩学は概念的思考の「背景」を隠喩使用に見た。ここではさらに、隠喩使用の「背景」が問題となるのである。

第二節　理論的好奇心の示準化石としての隠喩

では、こうした方向転換の先に、隠喩はどのようなものとして新たに捉えられるのだろうか。

> 私たちが学問に対して真理なるものを期待することができないということをもう認めなければならないとしても、いまや知ることの失望に結びついているものをなぜ私たちが知ろうと欲したのか、私たちは少なくともそれを知ろうと欲するのである。この意味で諸々の隠喩は、理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石（Leitfossilien einer archaischen Schicht des Prozesses der theoretischen Neugierde）である。この層が深く沈殿するものだと言っても、それを時代錯誤なものであると見なす必要はない。理論的好奇心の刺激や真理への期待の充実へと戻る道はそもそも何もないのだから。（SZ ebenda.）

かつて語られていたように、隠喩学者は原理的に解答不可能な問いに対して隠喩を駆使し応答することを自身の任務とするのではなく、歴史的に出現した隠喩使用を記述する。その意味で研究対象と距離があった。ここでもまたその距離は保たれているが、その理由がここでは一段と深められているように思われる。隠喩学的に距離を保つのは、ただ隠喩使用の機能を歴史学的に見定めるためだけではもはやない。ここで語られているのはむしろ、隠喩学的遂行の「なぜ」である。ロータッカーやガダマーのように、「哲学としての概念史」へと直接的にコミットする態度には、一九六〇年前後のブルーメンベルクもまた冷ややかであった。ただそこではなお自身の隠喩学こそ

が、概念史研究あるいは哲学への基礎を担うという自負が見え隠れしていた。ところがここではまた一段とメタ的な視点が取られている。私たちの地平を形成しているものは期待ではなくその断念である。この断念がかつての期待への省察を促すのである。そのような意味で、「非概念性の理論」にはかつての隠喩学に対する自己省察の側面が認められる。

隠喩もまたその視点から捉え返される。『隠喩学のためのパラダイム』でなされていたダイナミックな諸規定（触媒的領域、思考の下部構造…）と比較すれば、「示準化石」という控えめさがここでは目に付く。いずれにしてもこの新たな規定は何を意味しているのだろうか。その問いを念頭に置きつつ、本章では隠喩学のこのような変化がいかなる思考をなお可能にするものであるかを確認するために、六〇年代後半から七〇年代前半にかけてのブルーメンベルクの議論を見ていくことにする。そうすれば、ブルーメンベルクの思考の歩みを背景問題の深化として理解するための糸口が得られるに違いない。(32)

第三節　理論的好奇心を駆り立てるものと抑制するもの

隠喩とは「理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石」であるという新たな規定を検討することから始めてみよう。いくつかポイントがある。まず「理論的好奇心を裁定している」と訳した部分（ドイツ語では des Prozesses der theoretischen Neugierde）であるが、これは初版が一九六六年に刊行された『近代の正統性』(*Legitimität der Neuzeit*) 第三部のタイトルに相当する。日本語の訳書(33)では「理論的好奇心に対する審判のプロセス」という訳が与えられている。Prozeßという語には「訴訟」と「経過」というふたつの意味があり、ブルーメンベルクの議論もその両側面に関わるものとなっている。

その第一章「理論的動因が妨害に弱いこと」(LN 263-277) で述べられているように、主題となる「理論的好奇

心」は現代では科学の進展を促す動因となるものである。今日の科学は私たちの至福を目指すための道具ではなく、それ自身の動機によって駆り立てられるにすぎない。そこに「理論的好奇心」という情念的なものが動員されているのである。ところがそれはヨーロッパの全史を通じて無条件に肯定されてきたわけではない。むしろ理論的好奇心に場所を与え現在の私たちの関心をそれによって駆動しているものが何であるのか。この問いを解明するためにブルーメンベルクは古代からフォイエルバッハやフロイトに至るまでの好奇心論の歴史を叙述する。その際に考察の軸となるのが、理論的好奇心そのものの生理学的メカニズムではなく、むしろそれを一般的に認可し肯定するもの、あるいは逆にそれに審判を下し抑制するものなのである。[34]

ここですでに「理論的好奇心」を駆り立てる「背景」への主題的な問題意識が示されている。とはいえ近代性をどのように特徴づけるべきかという『近代の正統性』という著作全体の課題からすれば、中世神学的な裁きからの解放による好奇心の近代的推奨という側面に記述の焦点が絞られるため、先ほどまで確認してきた初期隠喩学の議論と積極的に結びつくものは少ない。「理論的好奇心の裁き」の問題と結びつけながら、隠喩学の射程を再設定するという作業は、むしろ『近代の正統性』以降の課題となる。

第四節　概念史研究からの独立

一九七一年、ブルーメンベルクは『概念史アーカイブ』誌に「隠喩についての観察」(Beobachtungen an Metaphern) と題した論文を発表している。「観察」というタイトル、および論文内でのいくつかのモチーフ（現存在の隠喩としての航海、難破、観望者）は一九七九年『観望者のいる難破船』に引き継がれるものである。のみならず、「非概念性の理論への展望」へとつながるような隠喩学の捉え直しがここですでに見られるのも、本論文の観点にとっては重要である。

その第一章「観察者を局限すること」(I. Lokalisierung des Beobachters)で、ブルーメンベルクはまず、『哲学の歴史的辞典』(HWPh)第一巻(同年の一九七一年刊)巻頭に掲載されたヨアヒム・リッターの「諦め」に言及している。概念史に関する共同研究の最大の成果のひとつとしての『哲学の歴史的辞典』は、ブルーメンベルクの根本的な問題提起にもかかわらず、隠喩をそこに収集することを断念した。[35]

リッター自身が述べているように、[36]『哲学の歴史的辞典』はルドルフ・アイスラーによる『哲学的概念辞典』(一八九九年)のプロジェクトを引き継ぎ補完するという理念を抱いていた。ブルーメンベルクはコント主義者であったアイスラーとのこの結びつきが、リッターの企てに対し、概念論を一義的に整備するというデカルト的理想と、歴史的に自己把握する哲学との間での緊張をもたらしていると指摘する(BM 162)。その緊張を解消し両者を一致させることが概念史研究に向けられた期待であり要求であった。

だとすれば、デカルト的理想に対する根底的な疑念を抱くブルーメンベルク的隠喩学の問題提起が『哲学の歴史的辞典』によって引き受けられえないというのは当然の帰結として明らかになる。概念史研究にとって、たしかに隠喩学はなお「概念形成の発生的構造へとアプローチするための補助」(BM 163)となることは認められているが、それは後者が概念的一義性への到達を「想像的背景と生活世界の手引きの貧困化」(BM ebenda.)の結果として明らかにしてくれることによる。だとすれば隠喩学者はなお概念史研究の理想に付き合い続ける必要はあるのだろうか。

予想された決裂がこうして現実のものとなることで、ブルーメンベルク隠喩学は概念史研究の軛から解放され、自身に固有の課題へと直接的に向かい合う機会を得るのである。それについてブルーメンベルクは次のように述べている。

隠喩学はその対象性に関して概念形成の前領域（Vorfeld）や下部構造（Substruktur）として見なされてもよいだけではなく、それは逆の方向で、構成に関わる利用手段を生活世界における成り立ちへと遡求して明らかにすることの可能性（Rückführbarkeit）を開示する。構成の手段はたしかにそこに由来するわけではないが、多様な仕方で背後に結びつけられて（zurückbezogen）いる。生活世界は加工されうる素材を提供するだけではなく、そのような加工に反対し、そこで果たされたものを承認することに反対しもする差分化された抵抗構造を備えもしている。（BM 164）

隠喩学の意義は概念形成論に限定されるわけではない。隠喩使用が開示する生活世界への結びつきこそ、改めて主題化されるべきなのである。ただこうした視点自体はたしかに、生活世界という術語は登場しなかったものの、初期隠喩学においてもほのめかされてはいた。モデル化された隠喩が思考の背景として機能するという「背景隠喩法」が「隠喩学のためのテーゼ」および『隠喩学のためのパラダイム』第六章で論じられたとき、そこでは言語による先行的な規定と「イメージの蓄積と選択」による「誘導」という現象が認められていたのである（本論文第一章第九節、第十節参照）。とはいえそこでは概念史研究との連携という限定の中で、「背景」の問題系は他の性格づけ（概念形成の前領域、思考の下部構造など）と並ぶ観点に留まっていた。それがいまや概念史研究から独立の学問的作業領域として提示されることで、隠喩学の中心的課題として浮上してくるのである。これがまさに「非概念性の理論への展望」での隠喩に対する規定、すなわち「理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石」としての隠喩と訳した規定の「沈殿層」（die archaische Schicht、アルカイックな地層）という事柄に関わるものであるように思われる。

第五節　隠喩使用と生活世界

「背景隠喩法」は「隠喩学の体系論」の課題となりうるものであると予告されていた。この点を重視するのであれば、隠喩学を概念史研究から切り離し、「背景」の問題系へと集中させることについては、すでに初期から見通しが立てられていたと言えなくもない。生活世界論の導入も、以前から準備されていたそのような下地のもとでなされたのであると整理することもできよう。いずれにしても問題なのは、このようなかたちで隠喩学を再編成し、その視点の方向を転換させるブルーメンベルク自身の本来的な関心がどのように理解されうるのか、という点である。具体的に言えば、隠喩と生活世界はどのように関連するのか。その関連を明確化することでブルーメンベルクは何を狙っているのか。この点を以下に見ていくことにしよう。

論文「隠喩についての観察」第一章では、観察主体の隠喩としての「観望者」(Zuschauer) の問題と絡めて、[37] 隠喩の背景的性格がさらに考察されているが、ここでは背景モチーフに限定して議論を追跡しておきたい。「隠喩は想像的文脈へと入っていく (Metaphern ziehen in imaginative Kontexte hinein)。そうして比喩が隠喩から明示的に生じる。そのような明示性が達成されないなら、方向づけは背景的に (hintergründig) 留まりうる」(BM 167)。この明示化されない「想像的文脈」がブルーメンベルクの捉える生活世界の構造であり、隠喩はそこを行き来する。往来する中でそれが比喩として明示化される場合もあるが、暗示的なままにそれが背景として方向づけを行う可能性もここで述べられている。

> 私たちは諦めやかの「打消し」を確証することによってではなく、それらを生じさせないことによって生きている。生活世界は無効化と対峙する世界 (Welt auf Widerruf) である。隠喩はこの克服することのできない事柄を露わにするものの範例である。隠喩の中で未規定的な期待地平はひとまず分節化される。(BM 170)

隠喩は生活世界に属する期待の地平を特有の仕方で分節するものであるが、同時に明示的に分節化された事柄を知らぬ間にそこへと引き戻し、引き留めるものでもある。それによって概念的に構築された世界に対して妨害や抵抗を実行する。この抵抗機能に、概念形成の前領域にはおさまらない隠喩使用の側面が示されているとブルーメンベルクは考える。

> 隠喩の空間とは不可能な、失敗した、あるいはまだ固められていないような概念形成の空間である。概念性の規範は諸々の先行的な方向設定に基づいている。それらは必然的に、規範領域とその体系構築の外側にあるのでなければならないが、プロセスそのものに解消されるような、その発生にもっぱら関わる前領域を成しているのでもない。(BM 171)

第六節　隠喩の人間学

ここからブルーメンベルクの考察は、これまでとは異なった、いわば「人間学的」(anthropologisch) な観点を含んでくる。私たち人間の期待はなぜ概念による明示的な確証を得ることで満たされるのではなく、なお隠喩に頼らざるをえないのか。しかもなぜそれによって概念的世界に対して抵抗する必要があるのか。隠喩は私たちの生に対してどのような機能を果たしているのか。これらの問題意識のもとで、隠喩使用が再検討されていくのである。

これらの新たな問題に関連して、「隠喩についての観察」最終章「文化批判の背景隠喩法」(Hintergrundmetaphorik der Kulturkritik, BM 212-214) で、ブルーメンベルクは隠喩が理論的に確保された領域を越える先行把握的なものを持っていることに注意を向ける。人間は隠喩によっていわば何かを察知し、それを表現するのである。しかし隠喩にはそこで受け取られたもの、例えば目の前に迫る危機に対して万全に対処できる能力がない。むしろそ

の完全な克服を図る概念構築に対して「待った」を突きつけているのである。

> 隠喩の機能はリスクと安全確保のこの二元性（Dualität von Risiko und Sicherung）から明らかなものとなる。それは直観性の示唆を利用し、それによって概念形成の前段階や基礎であるのみならず、概念形成をまた妨害し、自身が示唆する方向へとそれを誘導するのである。（BM 212）

隠喩を使用することは、生の諸問題へと対処するための窮余の策として理解できる。[38] こうした隠喩の人間学的側面に関わる問題を、隠喩の場所である「修辞学」（Rhetorik、修辞、レトリック）と絡めてさらに主題的に考察するのが、「隠喩についての観察」と同年（一九七一年）に公表された論文「修辞学のアクチュアリティへの人間学的アプローチ」（Anthropologische Annährung an die Aktualität der Rhetorik）である。とりわけゲーレンの「欠陥存在」（Mängelwesen）としての人間という規定に依拠しつつ、ブルーメンベルクはここで隠喩使用が属する修辞学的状況の前提を「明証性欠如と行動切迫」（Evidenzmangel und Handlungszwang, AA 145）として捉える。手近な直観性を利用して隠喩を使用することは、明晰判明な理解が追いつかず、にもかかわらず行動へと駆り立てられている人間が、急場凌ぎの埋め合わせとして用いる苦肉の策である。そのような不完全な手段に頼らざるをえない存在者として、「人間は自己自身に対して直接的な関係や、純粋に「内的な」関係を持たない」（AA 134）。この「自己外性の構造」（Struktur der Selbstäußerlichkeit）をもとに、ブルーメンベルクは「人間はその状況が隠喩的ではなく、すでにその構造そのものが潜在的に隠喩的なのである」（AA 135）と結論づけている。

おわりに　何故知ろうと欲したのか――背景を主題化することの哲学的射程

これまで初期隠喩学のプログラム化から七〇年代の人間学化に至るまでのブルーメンベルクの思考展開を概観してきた。概念形成の前領域と体系的思考の下部構造を主題化する作業として構想された隠喩学の試みは、隠喩使用の「なぜ」に立ち返りその問いを掘り下げることで、生活世界論や人間学の議論を呼び込んだ。このような「視線の方向転換」は一方で概念史研究からの距離化と、本来的な隠喩学に固有の管轄領域を囲い込む意図を持っていたわけである。

しかしながら本論文の考察が明らかにしたように、そうした表向きの「転換」の背後で、「背景」の問題系に対するブルーメンベルクの一貫した視座が確認されたわけである。隠喩が思考や決断を誘導するという「背景隠喩法」は、生活世界論と結びつく素地を当初から備えていた。「非概念性の理論」として新たに展開した隠喩学は、背景としての生活世界に、文脈の攪乱（SZ 88）[39]、概念的な一義性への抵抗や引き戻しといった具体的な性格づけを付加する。それによって、「明証性欠如と行動切迫」という人間学的状況分析に基本的な事柄として、人間存在の隠喩的構造を指摘することに成功したのである。しかしそれでも、こうした哲学的人間学上の一般化されたテーゼが、ブルーメンベルクの狙いそのものではないということには、最大限に注意されなければならない。

本論文では扱うことができなかったが、例えば八〇年代後半に出版された『マタイ受難曲』(Matthäuspassion, 1988) 最終章「哲学者の神の過剰」が、神概念の崇高化とその抑制がもたらす「歴史的真空恐怖」(der geschichtliche *horror vacui*, MP 306) をテーマとしていることからも、ブルーメンベルクの主題的関心がなお「背景」に向けられていることを見て取ることができよう。人間学が隠喩使用の背景を語るのに対し、ここでのブルーメンベルクは明らかに哲学者・神学者たちの思考を駆り立てる背景として、あるいは私たちに「ニヒリズム」という時代診断

を下させる「背景」として、概念史の機能を構想しているのである。隠喩使用でも、人間学的事実でもなく、ここでは概念の歴史こそが背景となる。概念史へのこのような仕方での新たなアプローチは、ブルーメンベルクの思想的核心を、「非概念性の理論」や「隠喩学」などといったラベリングから切り離して捉えるべきであることを示唆している。敢えて誇張的に言えば、人間学も生活世界論も「背景」の問題系への考究の途上で試験的に呼び込まれたものにすぎないように思われるのである。このことを本論文は見ようとした。

「背景」の問題系へと定位するよう促すものとは何か。『観望者のいる難破船』「非概念性の理論への展望」の一節を再び引用しておこう。「我々が学問に対して真理なるものを期待することができないということをもう認めなければならないとしても、いまや知ることの失望に結びついているものをなぜ我々が知ろうと欲したのか、我々は少なくともそれを知ろうと欲するのである」（SZ 87）。背景への立ち返りはこのような断念から促される。それはまた私たち自身の背景、隠喩学者自身の背景へと直接的に向かおうとする道に対する諦めでもある。そこから根源ではなく受容が、直接性ではなく迂回が本質化する。それらもまた、ブルーメンベルク固有の哲学的思索圏を全体として照らし出すための必要な要素として、次に論じられるべきテーマとなる。(40)

※本研究は二〇二〇年度京都大学人文学連携研究者制度（受入教員：杉村靖彦、研究題目「ブルーメンベルクの受容理論を基盤とした宗教哲学」）、および日本学術振興会科学研究費助成事業「研究活動スタート支援」（研究課題「ブルーメンベルク神話・宗教論における文化哲学的受容概念の研究」、二〇二〇年九月～二〇二二年三月）による支援を受けて行われました。

注

（1）　ブルーメンベルクの著作からの引用は以下の版を使用し、「　」で該当箇所を明示するとともに（　）内に略号と頁数を挙げる。OD: *Die ontologische Distanz. Eine Untersuchung über die Krise der Phänomenologie Husserls*, Kiel, Univ., Philos. Fak., Habil.-Schr., v.

28.6.1950.（unpubliziert）

LM: Licht als Metapher der Wahrheit. Im Vorfeld der philosophischen Begriffsbildung, in: *Ästhetische und metaphorologische Schriften*, hrsg. von Anselm Haverkamp, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2001, S.139–171.

SL: *Schriften zur Literatur 1945–1958*, hrsg. von Alexander Schmitz und Bernd Stiegler, Berlin: Suhrkamp, 2017.

TM: Thesen zu einer Metaphorologie, in*: Archiv für Begriffsgeschichte 53*, Hamburg: Felix-Meiner, 2011, S.186–189.

PM: *Paradigmen zu einer Metaphorologie*, mit Kommentar von Anselm Haverkamp, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2013.

LN: *Legitimität der Neuzeit. Erneuerte Ausgabe*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2012.

BM: Beobachtungen an Metaphern, in: *Archiv für Begriffsgeschichte 15*, Hamburg: Felix-Meiner, 1971, S.161–214.

AA: Anthropologische Annäherung an die Aktualität der Rhetorik, in: *Wirklichkeiten in denen wir leben. Aufsätze und eine Rede*, Stuttgart: Reclam, 1981.

TU: *Theorie der Unbegrifflichkeit. Aus dem Nachlaß*, hrsg. von Anselm Haverkamp, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2007.

SZ: *Schiffbruch mit Zuschauer. Paradigma einer Daseinsmetapher*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1997.

（2） マールバッハの「ドイツ文学文書館」（Deutsches Literaturarchiv Marbach）に所蔵されたブルーメンベルクの遺稿、とりわけ「禁じられた断片」（UNF, unerlaubte Fragmente）とラベリングされた九箱の大きめのカードボックスに収められた資料からは、これまで研究蓄積を補完するような、あるいはそれを超えて新たな像を結ぶようなアイデアがさまざまに報告されている。

（3） Philipp Stoellger, *Metapher und Lebenswelt. Hans Blumenbergs Metaphorologie als Lebenswelthermeneutik und ihr Religionsphänomenologischer Horizont*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2000.

（4） Kurt Flasch, *Hans Blumenberg. Philosoph in Deutschland. Die Jahre 1945–1966*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2017.

（5） フラッシュは個人的な会食で聴いたというブルーメンベルク自身の回顧について語っている（Flasch, a.a.O., S.13以下、「食堂でのプロローグ」）。ブルーメンベルクはそこで個人史的経験から彼自身の学問的関心を結びつけて語っている。一方で、神学生として出発したブルーメンベルクの学問キャリアとアウグスティヌスに代表される中世神学を背景とした好奇心の抑制と自然科学研究の制限、他方で、戦時にU-Bootのテレスコープに付けるレンズを作っていた経験と近代科学の進展がある（Flasch, a.a.O., S.15）。

（6） Jürgen Goldstein, *Hans Blumenberg. Ein philosophisches Portrait*, Berlin: Matthes & Seitz, 2020.

(7) Goldstein, a.a.O., S.40.

(8) Rüdiger Zill, *Der absolute Leser. Hans Blumenberg. Eine intellektuelle Biographie*, Berlin: Suhrkamp, 2020.

(9) そのような観点による研究はすでに存在している。*Blumenberg lessen. Ein Glossar*, hrsg.von Robert Buch & Daniel Weidner, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2014は小事典形式の共同研究であり、ブルーメンベルクの中心的なモチーフを枚挙し、各文献でどのような扱いがなされているかを解説するものである。多方面に拡散するブルーメンベルクの議論を追ううえで便利な研究ではある。とはいえ本研究の取り上げる「背景」については取り上げられていない。

(10) ゴルトシュタインは父からの離反というモチーフは後の「現実の絶対支配」からの「距離化」につながるものであるということ、父なる神への着眼はブルーメンベルクのカトリック神学生としてのキャリアとの関係で考察可能であると指摘している（Goldstein, a.a.O., S.128）。

(11) 一九四九年に設立。一九五七年に「ヘーゲル著作集出版部会」が設立するまで人文系の助成はなかった。同年に設置された概念史部会はドイツ研究振興協会内部における初の人文系の学際的共同研究であった。ペゲラーによればこれらの大きな人文学政策は、一度は破滅と荒廃を経たドイツ精神史に対する古典と伝統を再び確保するために求められたのであった（オットー・ペゲラー「序章ヘーゲル研究」（オットー・ペゲラー編・寄川条路監訳『ヘーゲル講義録研究』、法政大学出版局、二〇一五年、二九頁）。

(12) Margarita Kranz, Begriffsgeschichte institutionell. Die Senatskommission für Begriffsgeschichte der Deutschen Forschungsgemeinschaft (1956–1966). Darstellung und Dokument, in: *Archiv für Begriffsgeschichte 53*, hrsg. von Christian Bermes, Ulrich Dierse und Michael Erler, Hamburg: Felix-Meiner, 2011, S.152–226. 続いて検討するブルーメンベルク「隠喩学のためのテーゼ」のテキストもここに収められている。

(13) *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, 12 Bde., hrsg. von Joachim Ritter, Karlfried Gründer und Gottfried Gabriel, Basel: Schwabe Verlag, 1971–2007. この辞典の特徴は哲学的概念の語義を分析的に提示するのではなく、歴史上に現れた諸々の使用法を通時的にできるかぎり枚挙して整理するところにある。企画立案から完成までほぼ半世紀近くかかった歴史的事業であり、一五〇〇人以上の専門家が参加し三六七〇の項目を執筆した。

(14) *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland, 8 Bde.*, hrsg. von Otto Brunner, Werner Conze und Reinhart Koselleck, Stuttgart: Klett-Cotta, 1972–1997.

(15) 概念史という研究プロジェクトの全体像についてはErnst Müller und Falko Schmieder, *Begriffsgeschichte und historische Semantik: Ein kritisches Kompendium*, Berlin: Suhrkamp, 2016およびDers., *Begriffsgeschichte zur Einführung*, Hamburg: Junius Verlag, 2020参照。

(16) クランツによれば、一九五八年三月十四日付ガダマー宛書簡で、ブルーメンベルクは部会の目的について「見当がつかない」、誰が参加するのか、時間を無駄にするくらいなら「思いもよらずに」死んだ方がマシだと書いているとのことである（Kranz, a.a.O., S.164, 注四六）。ブルーメンベルクはそこで隠喩学の「原理的、方法的、パラダイム的」なものを論ずるのでよければ、という提案も行っている。結局「概念史」の共同研究ということであらかじめはっきりとしたイメージを抱いていたのはどうやら発起人のロータッカーやガダマーくらいであったようである（Kranz, a.a.O., S.165f.）。

(17) ブルーメンベルクと並び、古典文献学者ヴォルフガンク・シュミットの発表も行われた。クランツによれば、ブルーメンベルクの講演は長すぎて聴衆を疲労させ、彼の態度も悪かったので何人かには後まで響くような反感を買い、ロータッカーやガダマーが繰り返しなだめ仲裁に入らなければならないほどだった、という。概念史に関するこの共同研究が結果的に短命に終わったのは、そのような事情がもしかしたら暗雲を投げかけていたのかもしれないとクランツは推測している（Kranz, a.a.O., S.167）。とはいえ、概念史そのものに関わる発表がその後他の参加者によってなされることもほぼなく、概念史の基礎への問題意識が最後まで共有されなかったことのほうが解散の大きな原因であったとも思われる。その結果、個別的な実証研究だけが肥大化していくことになったのである。

(18) 『隠喩学のためのパラダイム』では、絶対的隠喩の絶対性について次のように述べられている。「これらの隠喩が絶対的である、と呼ばれることが意味するのはただ、それらが術語論的要求に対して抵抗的なものとして証明され、概念性へと解消されえないということであって、ある隠喩が別の隠喩によって代替ないし代理されることはできない、あるいはより正確な隠喩によって修正されえない、ということを意味するのではない」（PM 16）。

(19) 『隠喩学のためのパラダイム』「序論」末尾では次のように言い換えられている。「したがって絶対的隠喩もまた歴史を持つ。それは概念よりもラディカルな意味で歴史を持つのである。というのも、とある隠喩の歴史的変遷は、その内部で諸概念が自身の諸々の変容を経験するような、歴史的意味地平・視覚方式そのもののメタ的な推移系列の層（Metakinetik geschichtlicher Sinnhorizonte und Sichtweisen selbst）を出現させるからである。この内包関係によって隠喩学の（狭義の術語論的意味における）概念史への関係が従属（Dienstbarkeit）の関係そのものとして規定される」（PM 16）。

(20) Metakinetikに関わるMetakineseという言葉と、それに関連するGeschichtlichkeit der Geschichteというモチーフはすでに一九五〇年の教授資格申請論文「存在論的距離――フッサール現象学の危機についての探求」(未公刊。キール大学図書館において閲覧)において登場してきている。文脈に立ち入ることはできないが、「現実意識のメタキネーゼ」(OD 104)あるいは「歴史的意味地平のメタキネーゼ」(OD ebenda.)という言葉が一九五〇年の段階ですでに見られるのである。

(21) 『隠喩学のためのパラダイム』で言われるように、真理への問いが求め、哲学者たちを駆り立てていたのは、真理とは「事物が知性に一致すること」であるとか、いや「知性が事物に一致すること」だ、などという定義をめぐる抗争の貧しさに解消されるものではない(PM 18f.)。

(22) 『隠喩学のためのパラダイム』第七章「神話と隠喩使用」参照。

(23) 『隠喩学のためのパラダイム』第八章「ある隠喩の概念化:»Wahrscheinlichkeit«(確からしいこと、蓋然性)」参照。

(24) 『隠喩学のためのパラダイム』第十章「幾何学上での象徴使用と隠喩使用」参照。

(25) 『隠喩学のためのパラダイム』第九章「隠喩化された宇宙論」参照。

(26) 『隠喩学のためのパラダイム』第十章(PM 174ff.)。

(27) 『隠喩学のためのパラダイム』第十章(PM 179)。

(28) クランツの報告には発表の概要のほかに、それに対してなされた議論のプロトコルも掲載されている(Kranz, S.189ff.)。例えばハイムゼートは議論の冒頭で隠喩的背景を持たない哲学的概念はあるか、隠喩的背景のない思考は考えられるか、という質問を行っている(Kranz, a.a.O., S.189)。この疑問は隠喩学と概念史研究の有機的な連結に対する疑いの表明として理解できよう。ブルーメンベルク自身はここでは隠喩学と概念史研究をはっきりと対立させてはいないが、ハーヴァーカンプは隠喩学は概念史研究の対抗としてすでに理解できると解釈している(Anselm Haverkamp, Metaphorologie zweiten Grades. Unbegrifflichkeit, Vorformen der Idee, in: *Metaphorologie. Zur Praxis von Theorie*, hrsg. von Anselm Haverkamp und Dirk Mende, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2009, S.239)。

(29) ここではとくにヴィーコによるデカルト批判が引用されており、ブルーメンベルクは「想像力の論理学」(Logik der Phantasie)の問題系を利用して自身の問題設定の説明を図っている(PM 12)。ただここでのヴィーコ評価は両面的である。「ただ彼は、想像力の言語のために歴史の初期を取っておくかぎり、デカルト的図式へと退行してしまったのであった」(PM 14)。

(30) MetapherとMetaphorikの使い分けについて、本論文では前者を「隠喩」、後者を「隠喩使用」ないし「隠喩法」と訳し分けるこ

とで表している。前者が具体的な隠喩を示すのに対し、後者の「メタフォーリク」という言葉は主に隠喩の使われ方に関わる。代表的なのはここで論じる「背景として隠喩を使用すること」(Hintergrundmetaphorik) と、クザーヌスの無限半径を持つ円に代表される「隠喩を破砕するために隠喩を使用すること」(Sprengmetaphorik) である。後者は隠喩の自己否定によって言表しえないイメージの喚起を狙う隠喩の使われ方であり、否定神学的な神秘主義においてしばしば見られるものだとされる (PM 178)。

(31) ここでの主題は後の著作である『世界の読解可能性』(*Lesbarkeit der Welt*, 1981) に引き継がれる。そこでは「書物としての世界」という隠喩の歴史的推移と、それが持つ背景的機能が本格的に論じられることになろう。

(32) 本論文ではあくまで隠喩学の問題系とその展開に留まらざるをえないため、「生活世界」論についてのブルーメンベルクによる個々の論考を精査することはできない。それについてはとりわけ例えば遺稿集である *Theorie der Lebenswelt*, hrsg. von Manfred Sommer, Berlin: Suhrkamp, 2010 や、*Phänomenologische Schriften 1981–1988*, hrsg. von Nicola Zamboni, Berlin: Suhrkamp, 2018 など参照。

(33) ハンス・ブルーメンベルク『近代の正統性Ⅱ：理論的好奇心に対する審判のプロセス』忽那敬三訳、法政大学出版局、二〇〇一年。

(34) なかでも重要なポイントになるのは第六章「好奇心を悪徳の目録に組み入れること」(LN 358-376) におけるアウグスティヌス論である。好奇心の神学的抑制というテーマは若い頃からブルーメンベルクが関心を持っていたテーマであった。

(35) 『隠喩学のためのパラダイム』を引用しながらリッターは次のように書いている。「H・ブルーメンベルクが示したように、まさに概念性への解消を拒む隠喩が「概念よりもラディカルな意味で歴史」を持ち、「体系的結晶化の基底と培養」としての「思考の下部構造」であることは明らかであるのだが、編者一同は、心苦しくありながらも、隠喩や隠喩的な言い回しをこの辞典の一覧に加えることを断念した」(Joachim Ritter, Vorwort, in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Band 1: A-C*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1971, S.VIII-IX.)。「断念の理由」はこの分野の研究状況からしてこの辞典には過重な課題であること、不十分な即興に終わるくらいなら今後の研究の余地を残すべきであることが挙げられている (Ritter, a.a.O., S.IX)。ちなみにその後『哲学的隠喩辞典』がコナースマンによって編集・出版された (*Wörterbuch der philosophischen Metaphern. Studienausgabe*, hrsg. von Ralf Konersmann, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2014.)。

(36) Ritter, a.a.O., S.I. リッターは哲学辞典なるものの課題を以下のようにまとめている。それは「ある立場を規範的に妥当させ、統一を装い要請するのではなく、概念と術語の多様において自己成就する運動を引き受け、それを可能な限り透明にすることによっ

て、統一の可能な形成に寄与すること」(Ritter, a.a.O., S.VI) である。ここにライプニッツ、ヘーゲルからカッシーラーに至るまでの精神哲学の理想を見て取ることは難しくない。

(37) この問題は隠喩を観察する主体としての隠喩学の再帰的な自己省察とも理解されうる。この問題系は一九七九年『観望者のいる難破船』へと引き継がれていくが、村井則夫は「歴史的理性のメタ批判」という観点からそれについて論じている（村井則夫『人文学の可能性：言語・歴史・形象』(知泉書館、二〇一六年）とりわけ「第三章　生の修辞学と思想史――ブルーメンベルクの隠喩論と歴史論」参照)。

(38) 「文化批判」(Kulturkritik) は人間的生存に関わる隠喩のこうした機能を見落としがちであるが、それに対して正面から再批判を行うのではなく、ブルーメンベルクはこの論文の最後で「文化批判の隠喩学の必要性」について説いている。文化批判に固有の隠喩使用を分析することで、文化批判もまた「少なくともそれ固有の想像的背景を持つ」(BM 214) ことが示される。このような「迂回」的戦略が隠喩学はじめブルーメンベルク的思考を大きく特徴づけている。

(39) ブルーメンベルクは一九七五年夏学期にミュンスター大学で「非概念性の理論」と題した講義を行った。そのときの資料が二〇〇七年に遺稿として出版された。全体の内容としては、「非概念性の理論への展望」への下準備という性格もあるが、それ自体で独立した人間学的概念論である。その中に隠喩論も含まれる。そこでもまた文脈をかく乱するものとして隠喩の機能が考察されている (TU 61)。

(40) 受容と迂回を集中的に検討するのであれば、概念形成の前領域や、あるいは背景にもあてはまることのない、もうひとつの隠喩使用の局面もまた立ち現れてくる。それは隠喩学の言葉で言えば「破砕隠喩法」(Sprengmetaphorik) の問題である。原理的に表象しえないものを表象の自己破壊によって表現する隠喩の神秘主義的な使い方は、科学史における隠喩使用の分析と並び、いわば概念形成の「後領域」(Nachfeld) に関わる問題でありうる。

（筆者　しもだ・かずのぶ　成城大学文芸学部准教授／宗教哲学）

Die hintergründig gewordenen Metaphern und Hintergrund der Metaphorik
Eine philosophische Problematik von Blumenberg

by

Kazunobu SHIMODA

Associate Professor, Faculty of Arts and Literature,
Seijo University

Dieser Aufsatz versucht den Grundgedanken von Hans Blumenberg (1920-1996) dadurch zu verdeutlichen, sich auf ein Thema „Hintergrund" zu fokussieren und unter diesem Aspekt seine Werke zu analysieren. Zuerst wird die Problematik um dieses Thema bei seinem in fünfziger Jahren ausgearbeiteten früheren Projekt einer Metapherntheorie festgestellt, das von Blumenberg Metaphorologie genannt wurde. Man kann sowohl aus einer Rede von 1958, die „Thesen zu einer Metaphorologie" getitelt wurde, als auch dem programmatischen Buch *Paradigmen zu einer Metaphorologie* (1960) das spannende Verhältnis mit der damals modisch gewordenen Begriffsgeschichte deutlich sehen. Daher tauchte vor allem die systematische Stellung der Metapher als ein Vorfeld der Begriffsbildung auf. In diesem Argument spielte zwar die hinter dem Denken implizit wirkenden Funktion der modellierten Metapher eine bestimmte Rolle, welche aber erst später zentral wurde.

Das Problem dieser Hintergrundmetaphorik wird besonders zum Vorschein kommen, wenn in 1970er Jahren eine auf anthropologische Weise gestaltete Theorie der Lebenswelt in Metaphorologie zusammenfließt und damit Blumenberg einen neuen Denkrahmen der „Theorie der Unbegrifflichkeit" formuliert. Für den Gesichtspunkt dieses Aufsatzes ist es aufschlußreich, dass die Neuformulierung der Metaphorologie die Befreiung von der Beschränkung der Begriffsgeschichte bedeutet. Erst dann kann man klar verstehen, dass die Problematik um den Hintergrund im Zentral des metaphorologischen, unbegriffsgeschichtlichen Denkens von Blumenberg steht. Er thematisiert auf eigene umwegige Weise den prinzipiell unthematisierbaren Sachverhalt: den Hintergrund nämlich, der unser Denken, Gefühl und Entscheidung zwingend orientiert und in gewisser Richtung kanalisiert.